

クニヒトからナイトへ — その変遷から綴りと発音のメカニズムを探る — Spelling and Pronunciation Mechanisms: *cniht* to *knight*

石 山 久 美

英単語の綴りと発音が異なることは、多くの学習者を悩ませる一因になっている。例えば、Englishという言葉は、ローマ字通りに読むと「エングリッシュ」だが、発音は「イングリッシュ」である。また、athleteは「アスレテ」、businessは「ブシネス」、mirrorは「ミロワー」が綴り通りであるが、実際の発音は異なるというように、例を挙げると枚挙に暇がない。指導をする際には、そのことには言及せずに暗記で覚えさせることが通例だが、本稿では、knight（騎士）という英単語がクニヒトからナイトへと変化するその綴りと発音のメカニズムを解明することにより、学習者が適切な綴りと発音を習得するための一助としたい。

先行研究

英単語knightは、現在のスコットランドを含むブリトン島とアイルランド島において5世紀半ばから使われた古英語cnihtが語源だとされている（Murray J. 1893; Marstrander 1913; Craigie 1931）。cnihtの意味は、古英語辞典An Anglo-Saxon dictionary（Bosworth & Toller 1882:130）によると、

1. a youth
2. an unmarried man
3. a servant, man, follower
4. a man engaged in military service, a soldier
5. a disciple, scholar
6. a soldier of rank, a knight

cnihtの使用例の多くは「小さな男の子」であるが、「若い戦う兵士」という意味でも使われていたようである。

英語の歴史研究は、古英語（Old English）、中英語（Middle English）、近代英語（Modern English）、現代英語（Present English）という区分で、伝統的にはそれぞれの時代における英語の方言や特徴についての言語内分析を理論的に行なう。

歴史言語学においては、古英語期、中英語期、近代・現代英語期の外史を言語内史と合わせて総

合的に分析研究することによって、歴史がどのように英語という言語に影響を与えてきたかという視点から英語史理解を深める使命も果たしている。例えば歴史家Hughesによると、英単語knightという綴りの始まりは、アイルランド島、ブリトン島にいたアングロサクソン人にとって、また英国史上最大の屈辱でもあるノルマン征服時に、大陸から船に乗ってやってきたノルマン人騎馬兵戦士たちが、現地の言葉cnihtを自分たちへの呼び名として選び、その際同音のknechtという綴りとして以降、その綴りと意味に変化を及ぼした現象と合わせて説明している（2000:116）。

このような英語の内史、外史を含めた言語分析をする英語史研究により、英語が外国語からの語彙（借用語）を多く取り入れる性質を持っている言語であるということ、その結果、英語はゲルマン語系の言語であるが、今ではまるでラテン語系の言語ではないかと思わせるほどになっているということについて理解を深めることができる（家入 2021; 家入・堀田 2023; 大槻 & 大槻 2007; 白畑 2021; 寺澤 2013; 寺澤・川崎 1993; 中島・寺島 2019; 小川・小倉・松浪（編）2013; Hughes 2000）。

英単語knightについては、現代英語を教える者への英語学基礎知識として教師向けに英語史のエッセンスを詳細に整理したり（白畑 2021）、英語学の視点から音韻論、形態論、統語論、意味論、語用論を学ぶ前もしくは後に、英語の歴史を概観する中で、英語史の最大のミステリーである「大母音推移」の影響を受けた例として紹介されることも多い（西村 2021）。英語学の各分野を古英語期の原典を読みこんで言語分析をする研究（『リンディスファーン福音書とラッシュワース福音書』堀口 2012）、ラテン語文献翻訳の研究（石黒 2015; 岩谷 2010）、英国におけるknightの語源cnihtが、いかにケルト語源のcnapa（cnihtと同じく「少年」を意味する言葉）とは対照的な意味の変貌を辿り、現代英語のknightになったか、変遷についての説明もある（「英国におけるKnight」小林 2000）。第二言語習得研究としては、アラビア語母語話者を対象とした英語学習者の中間言語分析研究として、綴りと発音の違いによりknightの発音がいかに習得困難であるかが示されている（Al-Hamzi 2022）。

本研究では、英単語knightがcniht/kneçt/からknight/nait/へと変わったその変遷から綴りと発音のメカニズムを通時的に探る。「16世紀が語源的綴り字の全盛期であることは確実だが、語源化の時期や速度は単語によってまちまちであり、17世紀にまでもつれ込むものもあった」（家入・堀田 2023:95）に示される研究の方向性に従い、ゲルマン本来語とされている単語一つknightを選び、英語の歴史を振り返る。knightの発音のように「発音の変化に綴りが追いついていない」と説明される現象について探究することには、英語史の英語教育への活用という意図もあるが、直接的にはまずは堀田（2023）が紹介する、「印刷術の発明が綴り字の標準化に資したという説については、近年、重要な異論が唱えられている」（Boffey（2007）, Salmon（1999）, cited in 堀田 2023:94）という点に特に注意をし、英単語knightについて、古英語から中英語、近代英語までの通史としてその変遷から綴りと発音のメカニズムを解明する。

研究方法

DOE (Dictionary of Old English)、MED (Middle English Dictionary)、OED (Oxford English Dictionary) という電子文献資料を利用し、英単語knightが使われている原典を読み分析する。DOEにはcnihtを使用している原文のデータが101、MEDよりknightを使用している原文が195あり、各綴りの例について下記の辞書から集められる原典を参照し、英単語knightの綴りと発音の変遷を通時的に分析する。古英語については、現在編纂の途中であるトロント大学のプロジェクトから英単語knightに関してはフルテキストにアクセスできるので、意味の理解も可能である。同じく中英語については、Middle English Dictionary (MED) において利用可能となった文献資料をコーパスとして活用することで、英単語knightの綴りの違い、綴りごとの意味の違いを抄出できる。

The Dictionary of Old English. (DOE)

<https://tapor.library.utoronto.ca/doe/>

A Thesaurus of Old English

<https://oldenglishthesaurus.arts.gla.ac.uk/category-selection/?word=cniht&category=>

OED Online

<https://www.oed.com/search/dictionary/?scope=Entries&q=cniht>

Middle English Dictionary (MED)

<https://quod.lib.umich.edu/m/middle-english-dictionary/dictionary/MED24418>

An Anglo-Saxon dictionary (Old English Dictionary)

<https://bosworthtoller.com/wordlist/c>

Old EnglishについてはSweet (1896)、Hall (1996[1896])、Bosworth and Toller (1898) を活用することにより、当時の写本についての理解を深め、イギリスがまだ小王国で分かれていた時代から、古英語、中英語、近代英語という伝統的英語史の時代区分ごとに比較検討する。英単語knight（古英語期101と中英語期195）のデータから方言を定めるため、寺澤・川崎（1993）の『英語史総合年表』から原典が出された社会背景と英語の特徴について学び、小川・小倉・松浪（編）（2013:45-52）が定めた時代ごとの方言地域と、中尾・寺島（2019:32, 89）とに従い、作品の出典から方言区分を行う。異綴りについては西村（2019:17）に従い、全て出現箇所（原典テキスト）を一つ一つ確認する扱いとする。

結果

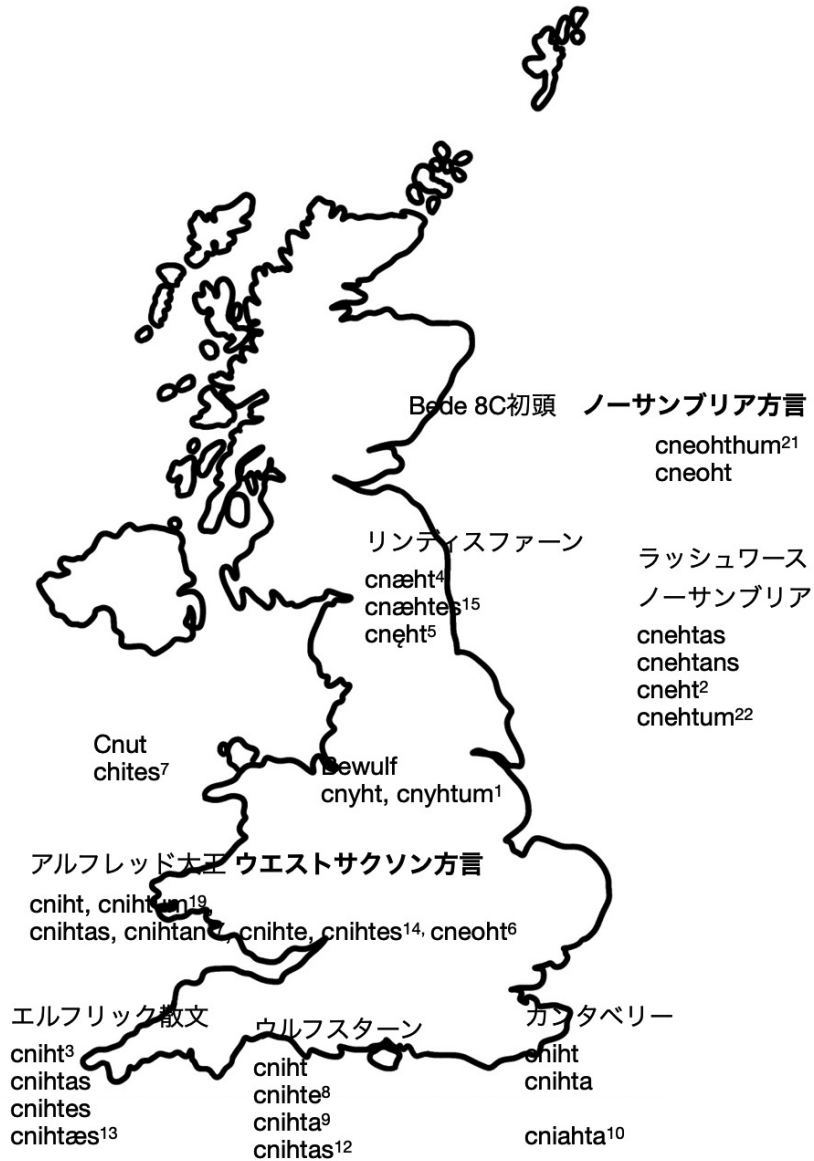
Old Englishにおけるknight

古英語において英単語knightは、cnyht¹、cneht²、cniht³、cnæht⁴、cneht⁵、cneoht⁶、chites⁷のように綴られる。

古英語期とはアルフレッド大王以前、アルフレッド大王時代、小王国時代の終わりである。ビードにより記録された歴史（The Old English Version of Bede's Ecclesiastical History of The English People（『英国民教会史』）によると、英語の始まりは5世紀中旬、現在の北ドイツ地域からきたAngle部族、Saxons部族、Jutes部族とフリジア人が持ち込んだ言語が源である。海を渡ってきたものたちがそのまま部族ごとにブリトン島に住み着いたと考えられ、5つの方言区画をつくる（寺澤・川崎 1993:11）。アングル族の話した言葉がノーサンブリア方言とマーシア方言、サクソン族の話した言葉がウエストサクソン方言、ジュート族の言葉がケント方言だとされている（小川 2013:5）。王国で使われていた言葉の綴り（すなわち発音）には、国部族ごとの特徴がありバラエティ豊かである。もちろん、政治的に国の安全と平和を守れた部族の地域とそうでなかった地域とがあり、残っている書物の量に偏りがある（小林 2017）。しかし現在確認できる資料をもとに、中西部のWALES（ウェールズ方言）、NORTHUMBRIAN（ノーサンブリア方言）、MERCIAN（マーシア方言）、WEST SAXON（ウエストサクソン方言）、KENTISH（ケント方言）という方言区分に英単語knightについて当てはめてみたのが図1である。

図 1

OEの方言区画：cniht (knight)



Middle Englishにおけるknight

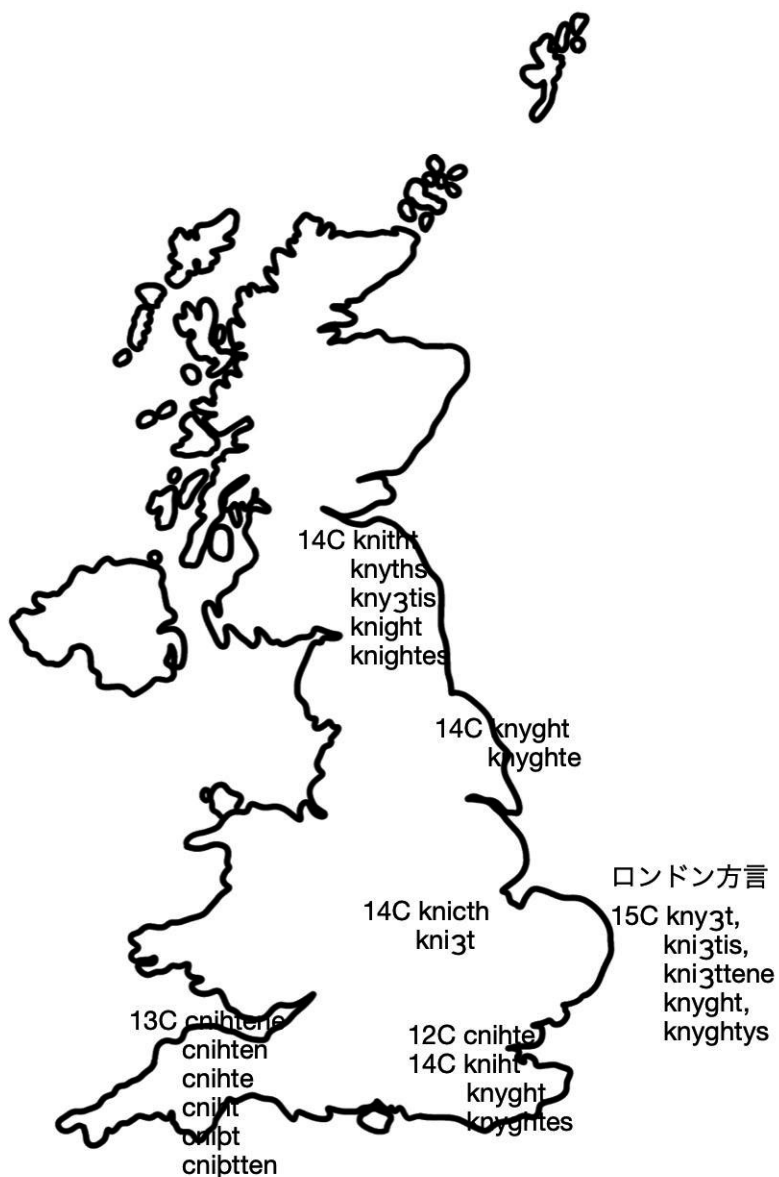
社会の変化に合わせて、Early Middle EnglishとLate Middle Englishと細分することもあるが、本稿ではノルマン征服(1066年)を中英語期の始まりとし、終わりは大母音推移の前(1500年)までとする(家入 2021:12-13)。

ME期において英単語knightは、*knyht*²³、*kniht*²⁴、*cnīht*²⁵、*kniȝt*²⁶、*knyght*²⁷、*knight*²⁸、*knyȝght*²⁹、*knyth*³⁰、*knith*³¹、*cnith*³²のような綴りである。

ME期の方言は、NOTHERN (北部)、EAST MIDLAND (東部)、WEST MIDLAND (西部)、SOUTH-EASTERN (南東部)、SOUTH-WESTERN (南西部)の5つとされており(寺澤・川崎 1993:35)、英単語knightについて方言区画に当てはめてみたのが図2である。

図 2

MEの方言区画：kny3t (knight)



ME期に、発音はクニヒトのままだが綴りはcnihtからknihtへ、語頭のcがkに変わる。また語尾から二つ目の子音 [ɕ] について、b、h、3、g、ghという文字で綴られている。写本ごとに中英語期の方方言区画（図2）を時代区分として整理しなおしたものが表1である。

表 1

MEの綴りの変遷：knygt (knight)

	年代	綴り (基本)	綴り (屈折語尾)	出典	地域	
中 英 語 前 期	12C		cnihte	Peterborough Chronicle	南東中部方言	『アングロサクソン年代記』 1170-1154の写本
	13C	cniht cnipt	cnihten cnihte cnipten	Layamon's Brut	南西中部方言	OE以来伝統の韻文史 ウェールズ国境近く
		cniht	cnihtene cnihtes knyghtes	Katherine Group	南西中部方言	韻文と散文。修道僧となった3人の 姉妹のために書かれた教本
		cniht	cnihtes	Ancrene Riwe	南西中部方言	『尼僧の戒律』（小倉 2013:47）
		cniht		The Owl and the Nightingale	南西部方言	八音節二行連句 作者不詳（寺澤・川崎 1993:73）
中 英 語 後 期	14C	knitht knight	knitht knigtis knightes	Cursor Mundi	北部方言	南部方言を北部方言へ書き換えた とされる長編宗教詩（ibid. 72-73）
			knyths	Hampole, Richard Rolle	北部方言	神秘主義文学（ibid.73）
		knyght	knyghte	Robert Manning of Brunne	東中部方言	年代記
		knichth		Havelok	東中部方言	脚韻詩
		knigt		William of Palerne	東中部方言	頭韻詩
		kniht		John Gower	東中部方言	口語的な宮廷英語（ibid. 84）
		knyght	knyghtes knygh	Chaucer	南東中部方言	ロンドン方言（小倉 2013:50）
	15C		knigten	Merlin	南東中部方言	散文
		knygt knyght	knyghtys	Lydgate	南東中部方言	ロンドン方言
			knygtis knygtene	John Trevisa	南東中部方言	ロンドン方言

Modern Englishにおけるknight

中英語期後半から近代英語期において重要なことは、発音が大幅に変化し、複雑化したことである。第一に、語頭のkの音は16世紀に消失し黙字となる。第二に、ghの/h/の音も消失もしくは黙字として定着する。そして、第三の変化は、/ni/の発音が/nai/という二重母音に変わったことである（中尾・寺島 2019:169-172）。これにより、英単語knightの発音は近代英語期に[nait] となる。

第1の変化

語頭の[kn] → [n]

knight [knɛt] > [nɛt]、[ni:t]

第2の変化

knight [(k)ni:ɛt]、[(k)nɛt] > [(k)ni:t]

第3の変化

knight[ni:t] > [nait]

以上がknightの綴りと発音の変遷である。古英語期から中英語期、近代英語期のスペルの変遷の歴史、出典、などを通史として分析したことをまとめると表2、図3のようになる。

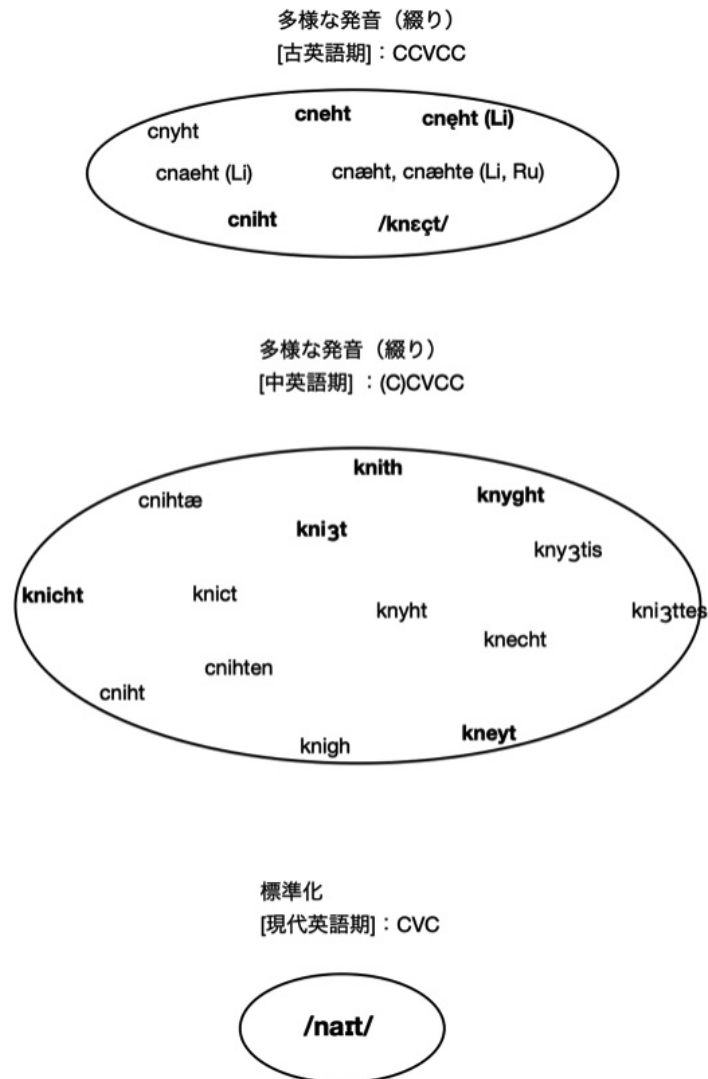
表 2

knightの綴りの変遷

	古英語期から	中英語期から	近代英語期から
	cn_ht	kn_t	標準化
y	cnyht ¹	knyht ²³	
e	cneht ²		
i	cniht ³	kniht ²⁴	
æ	cnæht ⁴		
ē	cnēht ⁵		
o	cneoht ⁶		
ch	chites ⁷		
		þ	
		cnipþ ²⁵	
		ȝ	
		kniȝt ²⁶	
		gh	
		knyght ²⁷	
		knight ²⁸	knight
		knyȝght ²⁹	
		th	
		knyth ³⁰	
		knith ³¹	
		cnith ³²	

図 3

knightの発音:/kneçt/ (CCVCC) から/nait/ (CVC) へ



近代英語において、綴りがknightとなり、発音が/nait/と標準化する (Murray 1893:732)。通史でみて特徴的なのは、ME期における子音の綴り字である。OE期には地域に住む部族の言語として母音に豊かな特徴はあるが、語彙構造としてはみなCCVCCであり子音の綴りも cn_ht と同じで安定している。それがME期には語頭に変化が見られ、cnihtはknihtとなり、cniçtはknyçtとなり、新たにghやthという綴りが挿入され出す。その他knyhtなど[-j-]という音をyやçで表現する特徴も見られることである。そして、近代英語期に標準化され、それが現代英語まで変わらず固定されている。発音がCCVCCからCVCに変化し、/nait/となる。

考察

結局のところ、多くの学習者を悩ませる一因になっている綴りと発音の乖離には、英語が外国語と接触したこと、特にフランス語の語彙の大量流入を主な原因とし綴りに特徴ある変化が起こされ、それが近代に入って半ば強制的にknight一つに「標準化」されたということだが、ブリトン島で使われていた英語の変化、すなわち歴史がどのように言語変化に影響を与えたかという点については不明な点も多い。本稿の主目的であるクニヒトからナイトへの変遷から発音と綴りのメカニズムを解明するため下記にOE期、ME期、ModE期の特徴をまとめる。

古英語期の特徴

OEでは綴られている通りの読み（発音）である。但し、ゲルマン系の言語であるknightを、ラテン語を表記するために使用されていたローマ字では表しきれない音だったことが、綴りからわかる。例えば、hは/h/ではなく/c/の発音である。写本に残されている綴りから英単語knightは[kneçt]と発音されたことがわかる。OE期は文字と発音がほぼ一致していたため、地域ごと、部族ごとに母音に特徴があり、cnihtは/kniçt/、cnehtは/kneçt/のような発音をされた。

アルフレッド大王のウェストサクソン以前にはマーシアが文化の中心であった（堀口 2012）ので、リンディスファーン福音書の写本にある古英語から英単語knightの綴りと発音の特徴をまとめると、一つ目は、[æ] や [e] の使用である。キリスト教とともにブリトン島へ入ってきたローマ字にはないルーン文字 [æ] の使用をしてcnehtと発音したり、[æ] 以外にも [e] など母音に特徴があったようである。二つ目の特徴は、前舌円唇母音 [y] の使用である（cnyht）。但し、これはBewulfをウェストサクソン方言とするかマーシア方言とするかによるので一概には言えないが、もしもcnyhtが古い写本に習ってそれを生かした文字であれば、現存する唯一のBewulfの写本は1000年頃に書かれたもの（寺澤・川崎 1993:17）ではあるが、アルフレッド前の古英語の特徴ということになる。しかも、[y] 音が [i:] へ変化する発音の変化が、英単語knightに関しては既に古英語期に起こっていたと解釈できる。すなわち、cnyhtが最も古い綴りで、その後cnihtということになる。cnyhtは、グレゴリウス1世（ローマ教皇）の『牧会記』という5－6世紀をアルフレッド大王が訳したとされる書物にも見られるので、地域の方言という分析はできないがやはり古い書物の英訳写本である。以上により、通常中英語期の中部方言で顕著であった母音の変化がOE初期に前倒して起こっていたと考えられる可能性が出てくる。

王国として影響力が大きかったアルフレッド大王はウェストサクソン方言を英語としてある程度標準化させたようである。エルフリックやウルフスタンという当時の二大散文家が作品の中で綴りをiで統一している。アングロ・サクソン民族の方言が標準文語英語として確立していたと言えるのは、のちに英語の辞書を編集する際にknightの原語はcnihtとされているからである。

アルフレッド大王の後にクヌート（Cnu）がブリトン島を統一した大王だったことが、chites⁷という特徴ある綴りで確認できる。もちろん、cをchと写し間違えたという写生字の問題である可能性もある。しかし、古英語期の最後、クヌートの時代10世紀にcの発音が、[k] だけでなく、前

舌母音の前では [tʃ] と発音される口蓋化 (palatalization) も加わるという発音の変化が起こっていたことを示す手がかりではないだろうか。ノルマン征服が1066年に起こる前の時期にイギリス王として即位 (1016) したクヌートは、デンマーク出身のデンマーク王 (1018) でありスウェーデン王 (1028) でもある。天使から王冠を受ける自らを絵で記録している (寺澤 1993:31)。強い個性を持った「イギリスの王」として、おそらく海を渡り征服するためにアイルランド島を目指したはずである。アイルランド方言にchという綴り (発音) が残っていることと関係がある可能性もある。cnihtはアイルランド語でnicht (Marstrander 1913) で、スコットランド語でknight (Craigie 1931)。

この時代は語尾変化があったこともわかる。cnihtの豊かな屈折が原典において見られ、cnihte⁸、cnihta⁹、cnihta¹⁰、cnehtana¹¹、cnihtas¹²、cnihtæs¹³、cnihtes¹⁴、cnæhtes¹⁵、chites¹⁶、cnihtan¹⁷、cnihten¹⁸、cnihtum¹⁹、cnyhtum²⁰、cneohtum²¹、cnehtum²²などであるが現代英語とは全く異なり複雑な変化の法則があるのを確認できる。

一見するとノーサンブリア・マーシア方言と思われるcneohtという特徴ある綴りについては、ウェストサクソン方言でも見られるものであった。古英語初期の写生字が活かされたとなると、知的産物への敬意や継承の重要性が古代英国においてあったと理解できる。

中英語期の特徴

中英語期は1066年のノルマン征服により英語がフランス語に支配される時代である。1054年にローマにおいて西ローマ帝国の中心であるカトリック教会と、東ローマ帝国の中心であるコンスタンチノープル教会が分裂してしまうことが発端で、西ローマ帝国の中心であったローマ・カトリックのローマ教皇が、自らの絶対的な地位を主張し始め権力闘争を始め、Vikingと呼ばれるノルマン人を利用してブリトン島、つまり英国を征服させた。自国の領地拡大のためである。中世のイングランドに住んでいたアングロサクソン農耕民にとっては、海のむこうからやってきた言葉も習慣も異なる民族に、突然支配をされることになった大事件でフランスのノルマンディ公ウィリアムがイングランド王とされ、フランス王朝の支配が250年続くことになる。ノルマン征服後、中英語期のブリトン島の社会構造は変革され、王侯貴族は全てフランス人。上流階級の人々は皆フランス語を話し一般庶民は英語を話すというように生活の中で英語が重要視されなくなったため、英語はかなり自由に変化していく。この時期は「英語の試練」(小倉 2013:39) とされるが、英語は生き続ける。英単語knightもこの時期にフランス語の影響を受けて変化し、文法体系は曖昧なものと変化しながら、非常に豊かな言語音声を地方ごとに残す。同時に、社会の変化の中でロンドンを新しい生活の場として都市へ向かった人の流れが進み、ロンドン方言というものができる。

ME期においても英単語knightの綴り (発音) は地域によって様々であり個性豊かに表現する自由さが特徴である。OE期との最大の違いは、英語が重要視されない状況の中で、作家たちが英語をあえて使おうとしていること。作家たちの判断で同じ作品の中で英単語Knightの綴りを意味によって変えているケースも見られる。例えば、kniȝtというスペルでの使用例では8割以上が「高貴な騎士」を意味し、「大陸から馬に乗ってきた外国の戦士」から更に広がっている。Robert Ma

ningにおいては、The Story of Englandというイギリスの歴史を記録した本の中で、「聖書時代または古代の兵士」という意味の時にはknyght³³と綴り、「チェスの駒（馬）」という意味の時にはknight³⁴と使い分けている。

文法においては、中英語期においてはまだ語尾変化はあったが、「屈折語尾水平化の時代」と呼ばれている通り（家入 2021:57）、簡略化されている。英単語knightの語尾変化については、古英語期における-a, -um, -u, -ena, -anなどかなり複雑であった体型はME期には見られない。複数形では -es、その他は-en、-is、-eのみ（knyghte³⁴、knyghten³⁵、knyghtes³⁶、knyghtis³⁷）である。

語頭のcがkに変わってはいるが、ローマ字では正確に表記できない音をȝというルーン文字にすることも、ブリトン島本来語の表記をあえて使おうという動きだとも考えられ、中英語期の英単語knightの綴りに、外からのものを取り入れて変化する英語の性質と、それを嫌がる性質とが混在している。ノルマン征服（Norman Conquest）以降、イギリスの支配階級は学問や宗教、公文書の記録にラテン語を使用してきたが、中英語後期からは英語にラテン語を借用するようになり、ラテン語の英語化も進む（“Where Do English Words Come From”）。それは英語を自国の言葉として復興させようという近代の動きへつながる。

近代英語期の特徴

近代英語期が始まる西暦1500年は、ヨーロッパにおけるルネサンス（文藝復興）によってラテン語やギリシャ語の古典が重んじられるようになった時代であり、英国においても英語を英国人の言語として威信を高めるために様々な動きがある。1485年、ヘンリー7世の即位によってチューダー王朝が始まり、聖書の英訳を行いその過程で標準文語英語が確立する。同時期にシェイクスピアに代表される標準口語英語も確立され、それが活字印刷による英語書物の普及と国民教育の波及とつながる。1604年に出版されたロバート・コードリーの『Table Alphabeticall』は、史上初の単一言語による英語辞書であり（Hughes 2000）、英単語の綴りは固定化する。このような過程の中で、あれほど自由に表現されていた地域ごとの特徴あるスペルが半ば強制的にしかし一つに統一され、標準化される。

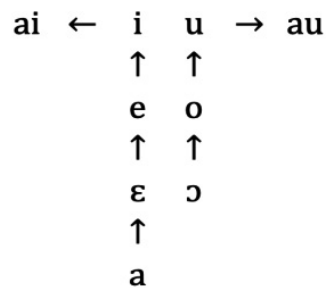
近代英語の子音については、既に中世後期から作家たちは個性豊かに外国からの色々な文字を挿入しているが、それらが近代には無音文字として定着していく。同時に、この英語子音システムに見られるバラエティを元に戻して整理しようとする動きも起こる。19世紀の「英語綴り字改革運動」である（山口 2009）。結果からすれば、この運動は失敗におわる。文字は綴るが発音はされないというghやknはラテン語やロマンス諸語の影響を受けたと考えられ、そのような語源の歴史を守るという保守派の意見により、中世後期から半ば強制的に固定され標準化された綴り字はそのまま、語頭のkが発音されなくなった現象が定着化し、英単語knightは現代英語でもknightという綴りで確定する。

しかし、英語綴り字の改革派は、knightのghやkなど無音を綴りに入れずに語を発音されるままに綴るという表音主義の考えで、近代に英語学問を発展させる。すなわち、ヘンリー・スウィート

と共に音声記号がこの動きの中で整えられ国際音声記号 (International Phonetic Alphabet) を作りここに音声学が生まれるのである。のちに説明する大母音推移の名付け親であるデンマーク人言語学者のJespersen(イエスペルセン)は、英語綴り字改革運動の改革派の一人であり、外国人の英語教師としてそれを推進しようとしたのである。

近代英語初期の変遷で最も複雑なのは綴りではなく、発音である。特に母音において、いわゆる大母音推移 (The Great Vowel Shift) という非常に特徴ある大きな発音変化の影響を受け、英単語knightの/nɪ/の発音が/nai/という二重母音に変わる。

大母音推移とは、歴史上唯一一回きり英国でのみに起こった英語の長母音が連続的、規則的に変化した現象である。この英語母音の大変化の動きをGreat Vowel Shiftと名付け、7－8個あった英語の母音の一つずつ上に上がった一連の母音推移を説明するためにイエスペルセンが最初に使った図は下記である。



(Jespersen 1954:231)

Jespersen は、著書*Modern English Grammar on Historical Principles Part I - Sounds and Spelling*の中でGVSを下記のように説明する。

The great vowel-shift consists in a general raising of all long vowels with the exception of the two high vowels /i/ and /u/, which could not be raised further without becoming consonants and which were diphthongized into /ei, ou/, later [ai, au] . In most cases the spelling had become fixed before the shift, which accordingly is one of the chief reasons of the divergence between spelling and sound in English: while the value of the short vowels (bit. bet. bat. full. folly) remained on the whole intact, the value of the long vowels (bite. beet. beat. abate. foul. fool. foal) was changed. This change is disguised in the case of /u/, because the digraph ou (ow) seems better adapted to express the. modern diphthong than the ME monophthong /u/.

その後、GVSについて母音変化を現代英語まで繋げて説明するようになり、GVSによって起こった母音変化は下記としてまとめられる（中尾・寺島 2019:172）。

I	II
ME [i:] → [əɪ]	(→ [aɪ])
ME [u:] → [əʊ]	(→ [au])
ME [e:] → [i:]	
ME [ɛ:] → [e:] → [i:]	
ME [o:] → [u:]	
ME [ɔ:] → [o:]	(→ [ou])
ME [æ:] → [ɛ:] → [e:]	(→ [eɪ])

このように、英単語knightもこの一連の動きの中で 母音 [i] を [ai] にシフトし、knightの発音は、/kneɪt/ (CCVCC) から /naɪt/ (CVC) へと変わる。

結論

本稿の目的はknightの綴りと発音の乖離について古英語、中英語、近代英語それぞれの綴りの特徴と地域性を整理し、そのメカニズムについて解明することであった。DOE、MEDをコーパスとして利用し、英単語knightの発音と綴りの変遷を通時的に分析した結果、始まりはゲルマン語の英単語cnihtがのちにラテン語化し、外国語の文字を取り入れて変化したことが明らかとなった。発音が大きく変わったのは、自然変化だけではなく「大母音推移」の影響である。大母音推移については、現在なぜ起こったのか定説はなくいつ始まったかさえ意見は一致していないので、さらなる研究を必要とする。また綴りごとの意味の違いを含めた「古英語、中英語、近代英語という時代の境界をまたぐ長期的な言語変化を包括するような調査分析」（家入・堀田 2023:188）としていくため（特に「方言である」とするため）には、統語、形態、語用分析が必要であるが、それらは今後の研究とさせていただく。

注

1. Beo A4.1 Beowulf: Dobbie, 1953 3-98; Dobbie, E.V.K., Beowulf and Judith, ASPR 4 (New York). Cited by line no. following ed.
2. MtGl (Ru)C8.2.1 The Rushworth Gospels (Mt): Skeat, 1871-87 25-245; Skeat, W.W., The Four Gospels in Anglo-Saxon, Northumbrian, and Old Mercian Versions (Cambridge) [repr. Darmstadt 1970] .
3. ElA2.6 Elene: Krapp 1932a, 66-102; Krapp 1932a, The Vercelli Book, ASPR 2 (New York) .
4. LkGl (Li)C8.1.3 The Lindisfarne Gospels (Lk): Skeat, 1871-87 15-239; Skeat, W.W., The Four Gospels in Anglo-Saxon, Northumbrian, and Old Mercian Versions (Cambridge)

[repr. Darmstadt 1970] .

5. JnGl (Li)C8.1.4 The Lindisfarne Gospels (Jn): Skeat, 1871-87 13-187; Skeat, W.W., The Four Gospels in Anglo-Saxon, Northumbrian, and Old Mercian Versions (Cambridge) [repr. Darmstadt 1970] .

6. CPB9.1.3 Gregory the Great, Pastoral Care: Sweet, 1871 24-467; Sweet, H., King Alfred's West-Saxon Version of Gregory's Pastoral Care, 2 vols., EETS 45, 50 (London) [repr. 1958].

7. CnutA45 Cnut's Song: Blake, 1962 153; Blake, E.O., Liber Eliensis, Royal Historical Society, Camden Society 3rd ser. 92 (London) .

8. ÆLS (Basil)B1.3.4 Saint Basil: Skeat, 1881-1900 I, 50-90; Skeat, W.W., Ælfric's Lives of Saints, 4 vols., EETS 76, 82, 94, 114 (London) [repr. in 2 vols. 1966].

9. AldV 1 (Goossens)C31.1 Aldhelm, De laude virginitatis (prose) and Epistola ad Ehfridum: Goossens, 1974; Goossens, L., The Old English Glosses of MS. Brussels, Royal Library 1650, Brussels Verhandelingen van de koninklijke Academie voor Wetenschappen, Letteren en schone Kunsten van Belgie, Klasse der Letteren, 36 (Brussels), corrections by Schabram, 1979 232-6; Schabram, H., Review of Louis Goossens, The Old English Glosses of MS. Brussels Royal Library, 1650 in Anglia 97: 232-6.

10. Ch 1103 (Harm 51)B15.1.108 Writ of King Edward, The English Cnihtengild, London: Sawyer, 1968 1103; Sawyer, P.H., Anglo-Saxon Charters, An Annotated List and Bibliography (London): Harmer, 1952 no. 51; Harmer, F.E., Anglo-Saxon Writs (Manchester).

11. DurRitGl 2 (Thomp-Lind)C21.2 Liturgical Texts, Durham Ritual: Thompson and Lindelöf, 1927 125-6, 145-7, 166-84; Thompson, A.H. and Lindelöf, U., Rituale ecclesiae Dunelmensis, Surtees Society 140 (Durham).

12. Ch 1422 (Rob 74)B15.4.6 The Community at Sherborne to Edmund Ætheling: Sawyer, 1968 1422; Sawyer, P.H., Anglo-Saxon Charters, An Annotated List and Bibliography (London): Robertson, 1956 no. 74; Robertson, A.J., Anglo-Saxon Charters, 2nd ed. (Cambridge).

13. LS 5 (InventCrossNap)B3.3.5 Invention of the Cross: Napier, 1894 2-34; Napier, A.S., History of the Holy Rood-Tree, EETS 103 (London) [repr. 1973] .

14. ÆLS (Basil)B1.3.4 Saint Basil: Skeat, 1881-1900 I, 50-90; Skeat, W.W., Ælfric's Lives of Saints, 4 vols., EETS 76, 82, 94, 114 (London) [repr. in 2 vols. 1966].

15. LkGl (Li) C8.1.3 The Lindisfarne Gospels (Lk): Skeat, 1871-87 15-239; Skeat, W.W., The Four Gospels in Anglo-Saxon, Northumbrian, and Old Mercian Versions (Cambridge) [repr. Darmstadt 1970].

16. CnutA45 Cnut's Song: Blake, 1962 153; Blake, E.O., *Liber Eliensis*, Royal Historical Society, Camden Society 3rd ser. 92 (London).
17. ChronE (Irvine) B17.9 Oxford, Bodleian Library, MS. Laud Misc. 636: Irvine, 2004 3-138; Irvine, S., *The Anglo-Saxon Chronicle: A Collaborative Edition*. Vol. 7: MS. E (Cambridge).
18. Nic (C) B8.5.3.1 Gospel of Nicodemus Homily (London, British Library, MS. Cotton Vespasian D.XIV): Hulme, 1903-4 591-610; Hulme, W.H., 'The Old English Gospel of Nicodemus,' *Modern Philology* 1: 579-614.
19. ByrM 1 (Baker/Lapidge) B20.20.1 Byrhtferth's Manual: Baker and Lapidge, 1995 2-236; Baker, Peter S. and Lapidge, Michael, *Byrhtferth's Enchiridion*, EETS S.S. 15 (Oxford).
20. Mk (WSCp)B8.4.3. 2 Mark (Cambridge, Corpus Christi College, MS. 140): Skeat, 1871-87 8-134; Skeat, W.W., *The Four Gospels in Anglo-Saxon, Northumbrian, and Old Mercian Versions* (Cambridge) [repr. Darmstadt 1970].
21. Bede 2B9.6.4 Bede, *History of the English Church and Nation*, Book 2: Miller, 1890-98 94-152; Miller, T., *The Old English Version of Bede's Ecclesiastical History of the English People*, 4 vols., EETS 95, 96, 110, 111 (London) [repr. 1959-63].
22. MtGl (Ru) C8.2.1 The Rushworth Gospels (Mt): Skeat, 1871-87 25-245; Skeat, W.W., *The Four Gospels in Anglo-Saxon, Northumbrian, and Old Mercian Versions* (Cambridge) [repr. Darmstadt 1970].
23. Lovel.Merlin (Corp-C 80) Merlin by Henry Lovelich, ed. E. A. Kock, vol. 1, EETSES 93 (1904; reprint 1973); vol. 2, Early English Text Society, Extra Series 112 (1913; reprint 1963) ; vol. 3, Early English Text Society, Original Series 185 (1932; reprint 1971).
24. Gower CA (Fr 3) The English Works of John Gower, ed. G. C. Macaulay, 2 vols., Early English Text Society, Extra Series 81 (1900; reprint 1978); 82 (1901). vol. 1 pp. 1 - 456; vol. 2 pp. 1-478.
25. Lay.Brut (Otho C.13) Laȝamon's Brut, eds. G. L. Brook and R. F. Leslie, Early English Text Society, Original Series 250, 277 (1963, 1978). odd pp. passim.
26. Glo.Chron.A (Clg A.11) The Metrical Chronicle of Robert of Gloucester, ed. W. A. Wright, Rolls Series (*Rerum Britannicarum Medii Aevi Scriptores*) 86 (1887).1-347 (line 4920), 358 (line 4930) -776.
27. Wycl.DSins (Bod 647) Select English Works of John Wyclif, ed. T. Arnold, vol. 3 (1871).119-67.
28. Chaucer CT.Kn. (Manly-Rickert) The Text of the Canterbury Tales ..., eds. J. M. Manly and E. Rickert (1940). vol. 3, pp. 40-126. Furnivall, Rolls Series (*Rerum*

Britannicarum Medii Aevi Scriptores) 87 (1887).7 (line 199) -580.

29. Oseney Reg. The English Register of Oseney Abbey, by Oxford, ed. A. Clark, Early English Text Society, Original Series 133, 144 (1907, 1913; reprint as one vol. 1971). 5-209

30. Rolle Psalter (UC 64) The Psalter ... and Certain Canticles ... in English by Richard Rolle of Hampole, ed. H. R. Bramley (1884). passim.

31. Cursor (Vsp A.3) Cursor Mundi, ed. R. Morris, Early English Text Society, Original Series 62 (1874; reprint 1966).985-991.

32. Ancient Charters in the Public Record Office:Pipe R.Soc.10 Ancient Charters Royal and Private Prior to A. D. 1200, part 1, ed. J. H. Round, Pipe Roll Society Publications 10 (1888).

33. "Hardy Iulius, **knyght** war & wys..gadered hym of knyghte 3onge."

a1450 (a1338) Mannyng Chron.Pt.1 (Lamb 131) The Story of England by Robert Manning of Brunne, ed. F. J. Furnivall, Rolls Series (Rerum Britannicarum Medii Aevi Scriptores) 87 (1887).7 (line 199) -580.

34. "Wyþ draughtes queinte of **knight** & rok, & oþer sleyghtes ilk oþer byswok."

a1450 (a1338) Mannyng Chron.Pt.1 (Lamb 131) The Story of England by Robert Manning of Brunne, ed. F. J. Furnivall, Rolls Series (Rerum Britannicarum Medii Aevi Scriptores) 87 (1887).7 (line 199) -580.

引用文献

Al-Hamzi, Ali Mohammed, Lilla Musyahda. (2022). Common error identification in pronouncing silent letters in English words by EFL novices. *PAROLE Journal of linguistics and education*. file:///Users/usapink3/Downloads/CommonErrorIdentificationinPronouncingSilent.....pdf

Bede, *History of the English Church and Nation, Book 1: Miller*, 1890-98 24-92; Miller, T., *The Old English Version of Bede's Ecclesiastical History of the English People*, 4 vols., EETS 95, 96, 110, 111, London. [repr. 1959-63]. <https://ia802904.us.archive.org/33/items/oldenglishversio01bede/oldenglishversio01bede>.

Bosworth, Joseph and Thomas Northcote Toller, eds. (1882-98). *An Anglo-Saxon Dictionary Based on the Manuscript Collections of the Late Joseph Bosworth*. <https://archive.org/details/anglosaxondictio00tolluoft/page/130/mode/2up>

Cameron, Angus, Ashley Crandell Amos & Antonette DiPaolo Healey, eds. (1986-). *A Dictionary of Old English*, Tronto: University of Toronto Press. <https://tapor.library.utoronto.ca/doe/>

- Craigie, William A et al. eds. (1931-2002). *A Dictionary of the Older Scottish Tongue: from the twelfth century to the end of the seventeenth*. Chicago: University of Chicago Press. Oxford: Oxford University Press. <https://dsl.ac.uk/results/%22knicht%22>
- Hughes, Geoffrey (2000). *A History of English Words*, Blackwell, Oxford.
- Kurath, Hans, Sherman M. Kuhn, John Reidy and Robert E. Lewis, eds. (1952-2001) *Middle English Dictionary*, University of Michigan Press, Ann Arbor. <https://quod.lib.umich.edu/m/middle-english-dictionary/dictionary/MED24418>
- Marstrander, Carl et al. (ed.), *A Dictionary of the Irish Language, based mainly on Old- and Middle-Irish materials*. Dublin: Royal Irish Academy (1913-1976). <https://dil.ie/search?q=cnicht>
- Mathew A.L. and Skeat, W. W. (1972 first published 1888.). *A Concise dictionary of Middle English*. Section 11. (pp. 126-127). Clarendon Press. https://books.google.co.jp/books/about/A_Concise_Dictionary_of_Middle_English_f.html?id=Cb4VAAAAYA_AJ&redir_esc=y
- Murray, James A.H., Henry Bradley, William A. Craigie and C. T. Onions. (1893). *A New English Dictionary on Historical Principles*. <https://archive.org/details/newenglishdict05murrmiss/page/732/mode/2up?view=theater>
- OED=The Oxford English Dictionary* (1933), ed. by James A. H. Murray, Henry Bradley, William A. Craigie and Charles T. Onions; *A Supplement to the Oxford English Dictionary* (1972-1986), ed. by Robert W. Burchfield; *The Oxford English Dictionary* (1989), 2nd ed., ed. by John A. Simpson and Edmund S. C. Weiner, Oxford University Press, Oxford. https://www.oed.com/dictionary/knight_n?tab=factsheet#39995346
- Otto, Jespersen (1954) *A Modern English Grammar on Historical Principles Part I - Sounds and Spelling*, 231-247, Routledge, London.
- Sweet, Henry, ed. (2009). *King Alfred's Orosius*. Part I. Old-English Text and Latin Original. Read Books Design. https://books.google.co.jp/books?id=csDsvnthPPUC&printsec=frontcover&source=gbs_atb&redir_esc=y#v=onepage&q&f=false
- "Where Do English Words Come From?" accessed August 2023. <https://www.wordorigins.org/harmless-drudge/where-do-english-words-come-from>
- 家入葉子 (2021) 『ベーシック英語史』, 1-63, ひつじ書房, 東京.
- 家入葉子・堀田隆一 (2023) 「英語史研究の潮流」 1-21; 「英語史研究の資料とデータ」 23-63; 「音韻論・綴字」 65-97; 「英語史研究における今後の展望に変えて」, 187-199, 『文献学と英語史研究』, 開拓社, 東京.
- 石黒太郎 (2015) 「オロシウス『異教徒に反駁する歴史』序文のラテン語について」 明治大学教養

論集, 504, 1-17. kyouyoronshu_504_1.pdf

岩谷道夫 (2010)「アルフレッド大王のオロシウスの古期英語訳におけるGodlandについて」法政大学キャリアデザイン学部紀要, 7, 37-58. file:///Users/usapink3/Downloads/cd07_iwaya-1.pdf
大槻 博・大槻きょう子 (2007)『英語史概説』, 燃焼社, 東京.

小川 浩・小倉 美知子・児馬 修・松浪 有 (編) (1995)「古英語」「中英語」「近代英語」『英語の歴史』, 3-132, 大修館書店, 東京.

小林絢子 (2000)「英国におけるKnightとその変遷について」東京家政大学文学部英語英文学科英語英文学研究, 6, 58-65. file:///Users/usapink3/Downloads/2012_e_0047-1.pdf

小林茂之 (2017)「アルフレッド大王以前の古英語の一例:ケンブリッジ大学蔵MS.Kk.5.16のCaedmon's Hymn」聖学院大学想像研究所 newsletter, 27(1), 4-8. file:///Users/usapink3/Downloads/27_3-1.pdf

白畑知彦 (2021)『英語教師がおさえておきたい言葉の基礎的知識』, 45-74, 大修館書店, 東京.

寺澤 盾 (2013)『聖書でたどる英語の歴史』, 12-49, 大修館書店, 東京.

寺澤 芳雄 (著)・川崎 潔 (編) (1993)『英語史総合年表ー英語史・英語学史・英米文学史・外面史』, 研究社, 東京.

中尾俊夫・寺島廸子 (2019)『図解英語史入門』, 17-189, 大修館書店, 東京.

西村秀夫 (2019)『コーパスと英語史』, 17-25, ひつじ書房, 東京.

西村秀夫 (著)・西光義弘 (編) (2021)「英語史」『英語学概論』, 288-365, くろしお出版, 東京

堀口和久 (2012)「リンディスファーン福音書とラッシュワース福音書の行間仲介と拡充形」千葉経済論叢, 47, 1-26. file:///Users/usapink3/Downloads/KJ00008219860.pdf

山口三知代 (2009)『英語の改良を夢見たイギリス人たち』, 129-217, 開拓社, 東京.

